

欧州研究者による幸福度に関するセミナー 講演録

アンドルー・クラーク 氏（仏国立科学研究センター教授）

コンチータ・ダンブロシオ 氏（ボッコーニ大学准教授）

日時：11月30日（金）14:00～16:00

場所：中央合同庁舎4号館共用第3特別会議室

司会：本日はお越しいただき、ありがとうございます。本日は、ヨーロッパから、幸福度の研究者として一線級の学者2人にお越しいただきまして、セミナーを開きたいと思っています。最初に、本日のプレゼンターの2人をご紹介させていただきたいと思います。イタリアからお越しになりましたコンチータ・ダンブロシオ博士です。自己紹介をお願いいたします。

コンチータ・ダンブロシオ氏：今日は、お招きを頂きまして、ありがとうございます。このようなかたちでわれわれの研究内容をご報告させていただきますことを大変光栄に存じます。

私は、経済学の教授をしております。私が教えている大学は、イタリアのミラノにございますボッコーニ大学でございます。学部で経済学を勉強したのはイタリアの大学でございましたけれども、Ph.Dはアメリカのニューヨーク大学で取りました。現在、イタリアに戻りまして、幸福度の測定の仕事に当たっております。

司会：それからまた、イギリス、現在、フランスで働いていらっしゃるアンドリュー・クラーク博士にお越しいただいています。

アンドリュー・クラーク氏：はい。お招きいただきまして、本当にありがとうございます。私は、パリ・スクール・オブ・エコノミクスで経済学を教えております教授でございます。Ph.Dはロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで取っております。このハピネス、幸福ということに関して、ここ20年間ほど関心を寄せて、そして研究を続けてまいりました。そして、その20年間、ほかの経済学者、エコノミストたちに、この幸福というものは非常に有用であり、適切な研究に値する課題であるということを説得するように、この20年、努めてまいりました。

司会：どうもありがとうございました。それでは、本日は、ダンブロシオ先生から最初にプレゼンテーションを行っていただきたいと思っています。

コンチータ・ダンブロシオ 氏 (ボッコローニ大学准教授) 講演

ダンブロシオ氏：私のこの研究発表の内容なんですけれども、われわれが今まで研究をや
ってまいりました2つの文献の合併、合体をする1つの例でございます。

ここで2つのものを組み合わせたと申し上げましたけど、まず1つありますのが、欧州
の社会政策の中心をなしております客観的な個人の幸福感の測定、つまり、物質的な満足
度、それから社会的排除、こういった尺度と、もう1つ何を組み合わせたかといいますと、
主観的な幸福感です。この主観的な幸福感というのは、欧州の今の議論では、あまり中心
的なポジションに就けておりません。OECD ではかなり中心的になっておりますし、また、
各国政府、特にイタリアなどでは、今、GDP を超えたこの主観的な幸福感というものを政
策に適用するという作業が進められておりますけれども、まだ欧州、EU レベルでは、これ
は中心的にはとらえられておりません。

ですので、私のこの研究論文の中で何を狙っているかといいますと、実証的にこの自己
申告された人生の満足度と、それから個人の幸福感、これは、つまり、欠乏であるとか、
社会的排除という指標をもって測定をされた個人の幸福感の間に関係があるのかどうかと
いうのを実証的に研究をしよう、調査をしようというものを狙っております。この社会的
排除の指標といった場合には、これは伝統的な所得分布の文献に基づいた測定が行われて
おります。

この調査研究を行った結果でありますけれども、この所得分布のリタレチャー、文献に
基づいて測定をされましたこの欠乏とか社会的排除の指標というのは、個人的な幸福感を
説明する要素として加えられるものであるということです。これは後で事例で申し上げて
いきますけれども、これにさらにほかの要素も加わってくるということです。

この幸福の研究、それから所得分布の研究、この2つ、これはどちらもとも個人の幸福感
と、それからその決定要因というのを見ていくわけですけれども、この2つの間では、
それほど重複はない、重なるところは、われわれの研究上ではなかったということです。

ただ、経済学的には、明らかにこの2つの間には重複する部分があります。といいます
のも、これは両方とも個人の幸福感というものを測っていくものであり、その個人の幸福
感を決定するという意味では、類似性があるからです。

この個人の幸福感というのは多元的であるということです。つまり、この幸福感の研究
の中では、所得というのは重要な要素の1つである。しかし、それだけではないと。幸福
感というのは多元的であるということです。この所得分布研究ですけれども、最も有名な
要素としましては、Amartya Sen からの貢献があります。Sen によりますと、社会の評価
の適切なスペースは、それは機能であるというふうに議論を展開しています。

どうということかといいますと、物質的な資源、例えば、お金であるとか、職業である
とか、住宅であるとか、こういったものは重要ではあるが、しかし、また同時に、社会的な

属性、例えば、教育へのアクセスがあるか、医療へのアクセスがあるか、そして友人や親せきと意味のある関係を結んでいるかという、そういった部分も重要であると指摘がされています。

この文脈の中では、欠乏、それから貧困というのは、これは単にお金という資源が不足をしているということで測定されるだけではありません。もっと包括的な概念、つまり、全体のその個人の生活の質というものを含んだ概念によって測られるものであります。そうなりますと、欠乏と貧困の定義というのはどういうものになるかといいますと、ある個人が人生における幸福感の最低基準を満たすための必須の条件が整っていない、それが欠乏している状態、それが欠乏と貧困であるというふうに定義がされることとなります。そして、この社会的排除のアプローチというのは、この貧困と欠乏というものを、これは多面的な、多元的な問題であるというふうに見なしています。この社会的排除の解釈の仕方ですけれども、次のように大まかに解釈をすることができます。それは、個人が欠乏の状態が持続することによって、その個人が政治的、経済的、社会的な活動に参加できなくなることを指します。

現在、ヨーロッパにおきまして、この社会的排除と、それから貧困というのが政治的な議論のかぎとなる概念となっています。1997年に調印をされましたアムステルダム条約の中で、欧州連合は、社会的排除を減らすということを目的の1つに掲げました。そして、この社会的排除と戦うことを狙った政策設計というものこそが、2000年の3月、欧州理事会で合意されたリスボン戦略の中心をなしています。

2010年というのは、欧州委員会によって、貧困と社会的排除と戦う欧州の年というふうに指定がされております。また、2010年3月の欧州理事会で合意をされたこのヨーロッパ2020戦略の中の5つの主要な分野の1つをなしておりますのが、社会的包摂の促進です。そして、貧困および社会的排除との戦い、これがヨーロッパ2020の進捗を進めるための7つのフラッグシップのイニシアチブの1つとなっています。

そこで、このペーパーの中で行おうとしているのは、この欠乏と社会的排除というものをまず測定をする。その測定をする際には、所得分配の文献に基づいて、その指標をもって測定をする。その結果、われわれが想定するように、果たしてこの欠乏と社会的排除というものが、これによって人々が幸福感が低くなっているのかどうかを確認するというのが目的となっています。そして、もう1つ、この研究の中で確認をしたいことというのは、欠乏と社会的排除によってこの幸福感というものが説明されるのかどうか。つまり、所得と、それから相対的所得に加えて、欠乏と社会的排除が幸福感の説明要素になるのかどうかということを確認したいと考えます。

それでは、この欠乏している人たちは一体誰であり、社会的排除を受けている人たちは一体誰であるのか。この相対的欠乏の定義ですけれども、所得分布研究で採用されたこの定義というのは、1966年、Runeimanが打ち立てた定義です。

まず1つ目は、ある個人がXというものに対して相対的に欠乏をしている状態というの

は、次のような状態である。1つ目、Xを持っていない。2つ目、ほかの人、もしくは過去の自分、もしくは将来の自分がXを持っている。そして、3つ目、Xを欲しい。そして、4つ目、Xを持つべきだと感じている。そして、このRuneimanは、さらにこう書いています。この相対的欠乏の度合いというのは、自分が望んでいる状態と、それからその望んでいる自分の現在の状態の間の差がどれくらいあるかによって決まると。

ですので、この欠乏を測定する際のかぎとなる変数の1つというのが、参照群ということになります。この参照群というのは、この個人が自分を比較するその対象です。社会において、この欠乏の測定は、伝統的には個人の所得を分析することによって行われてきました。といいますのも、所得というのは、資源をどれくらい支配できるか、それを表すものであり、また、この所得というのは、ものを消費する個人の能力を表す指標でもあるからです。

この欠乏の研究のフレームワーク、この枠組みの中で非常に重要な論文を書いたのは、1979年のYitzhakiです。しかし、われわれがこの中で使っていきます比較に基づいた欠乏の解釈を提案したのは、1980年のHeyとLambertです。この所得X、この欠乏を見た場合なんですけれども、この所得Xと、それから非対称的な感情、それからある一定、ある一時の期間ということでこの欠乏を見ていきます。非対称と言いましたのはなぜかといいますと、この個人が比較をしている相手というのは、自分より恵まれている人たちだけを対象として比較をしているということです。ということは、その個人が感じる欠乏というのは、自分の所得のレベルと、それから自分より恵まれている人たちの所得のレベル、合わせたもののその距離、それで、それが個人が感じる欠乏になります。

また同時に、自分より低いポイントにいる人たちとの比較、つまり、自分より貧しい人たちとの比較をすることによって、満足度を得るということにもつながります。なので、個人が感じるその欠乏というのは、自分よりも恵まれている、自分よりも豊かな人たちとの比較の平均となります。これが文献の中で欠乏を測定する伝統的なやり方です。

最近、しかしながら、この幸福感というのは多元的なものであるということが認識をされるようになり、その他の指標というものが見られるようになってきました。

その指標の1つというのは、私とBossert、Peragine、この3人が提案をした指標です。この指標は何であるか。その欠乏の指標は、さまざまな機能です。この指標をどのように作っていったかといいますと、機能不全の尺度というものを作りました。この機能不全の尺度というのは、その国の中で意味のあると考えられる機能をその個人が持っていない度合いと。それが機能不全の尺度です。ですので、この場合、欠乏、これは機能、それから非対称的な感情、そしてある1点でとらえることになります。

この q_i というのが、このデプリベーションの欠乏の値になります。この値が表しているものというのは、社会の中で意味を持つ機能が、その個人がどの程度持っていないのかということを表しています。個人が疎外されていると感じるときはどのようなときかといいますと、自分よりも恵まれている人たちとその自分を比較したときにその感情を持つこと

になります。自分より恵まれている人たちというのはどういう人たちかという、自分と比べて機能不全が少ない人ということになります。ここで使っていきます符号ですけれども、 π 、それから q を使います。 π のほうは、ポピュレーション、母数のシェアです。それから q のほうは、機能不全を表します。

われわれがここで提案をしておりますこの指標、これは **Bossert** と **Peragine** と一緒に提案をしております指標を表したのがこのスライドです。2つの部分から構成されています。まず1つ目が、アイデンティフィケーションの不足です。それから2つ目は、疎外感の集合、合算です。つまり、この2つ目の部分、この疎外感の集合体というのは、自分よりも恵まれている人たちと自分の状況の間のギャップを表します。この疎外感をいわゆるアイデンティフィケーション、同一感の不足で重み付けをします。この社会的排除でありますけれども、何を見ていくかといいますと、まず機能です。といいますのも、これは多元的なものであるからです。そして、またこれは非対称的な感情です。そして、経時的なものです。ある1点ではなく、経時的なものです。

ある個人が社会から排除されていると感じるのは、ある1点において貧しいからではなく、その貧しい状態が続く、持続する、もしくは、さらに悪化する、そういったときにおいて排除感を持つことです。特にその個人がより高いレベルの社会的疎外感、社会的排除感を感じる時はどういうときかといいますと、その欠乏が連続した時期につながって続くというときに、特に排除を感じます。一方、欠乏があっても、欠乏がない時期が途中に来れば、それほど高いレベルの排除感を感じなくても済みます。ですので、この社会的排除の測定の数値ですけれども、まず、以前の欠乏の状況、それプラス、その状況がどれぐらい、何期にわたってそれが続いたか、これを組み合わせます。

何枚かちょっと飛ばして進みます。実証的にこの自己申告された人生の満足度と、それからその個人の幸福感の間関係を調べるに当たって、私どもは個人の欠乏のよりシンプルな尺度を使っております。そのシンプルな尺度というのは、この機能不全の和です。機能不全を合算した和を使います。つまり、自分よりも恵まれている人たちとの比較は使わない、シンプルな尺度です。

それでは、この中で、欧州共同体のハウスホールドパネル、**HSEHP** を使って見ていきたいと思います。この際、われわれはこの **ECHP** のすべての期の分析に基づいてこの作業を行いました。この **ECHP** の期間ですけれども、1994年から2001年までです。そのデータセットの中で、15カ国のみが含まれております。いろいろな理由があって、すべての国々のデータを使うことができませんでした。この分析のときの単位というのは、個人です。私どもは、サンプルウェイトを使いました。そして、この欠乏がどれぐらい持続したのかというのを分析をしたかったために、すべての期、すべてのウェーブで面接を受けた、調査の対象となっている個人だけを分析の対象と致しました。

この欧州共同体のハウスホールドパネルで使われました変数のすべてがここに書いてあります。分野としては、5つかバーされています。まず1つ目は、資金的な困難。どういう

困難かといいますと、例えば、自分が住んでいるその世帯というのは、毎日の、もしくは、毎月の収入と支払いが賄えないというような家庭に暮らしているというのが1つ目。2つ目は、住宅ローンの支払いが延滞している、もしくは、電気料金の支払いが延滞しているような世帯に住んでいる、こういったものが最初の資金的な困難です。2つの分野というのは、生活の必需品、もしくは、最低限の必要なレベルが満たされているかどうかということなのですが、1点目は、例えば、2日に一遍は肉、魚、鳥を買うことができない。2つ目は、新しい洋服を買えない。3つ目は、1週間の休み、どこかに行くことができない。3つ目は、住宅環境です。1点目、お風呂か、お風呂やシャワーという施設が付いていない住宅に住んでいる。2つ目、壁や床や、それから土台が湿っている、じめじめしているような家に住んでいる。3つ目、十分なスペースがない家に住んでいる。

次の分野は、耐久財です。お金がないので、車へのアクセスが持てない。2つ目は、お金がないので、電話のアクセスが持てない。3つ目は、お金がないので、カラーテレビのアクセスが持てない。そして、5つ目の分野が、社会的な接触です。1カ月に一遍未満しか、友人や親せきと会っていない。なので、先ほどの q_i というものは何になるかといいますと、これはここのリストにあるもので、個人がアクセスがないというふうにした項目が幾つあったかということで決まってきます。

ここで、全部で12項目あります。もしこのすべてをその個人が持っていなければ、この q_i の値は12になります。もしくは、その個人がここのある12の項目すべて持っていると答えたならば、 q_i はゼロになります。

この ECHP の中では、われわれが見たいこの従属変数であります人生の満足度というのが欠けています。ただ、4つ、それに関連をした質問が提供されています。例えば、仕事、もしくは、主たる活動への満足度に関する質問もありますし、もしくは、財政的な状況に対する満足度、住宅に対する満足度、それからどれぐらい余暇があるかということに関する満足度、こういったデータがあります。この今申し上げました4つの満足度の変数ですけれども、1から6の値で測定がされています。

この4つの分野の満足度に基づいて、スタンダードなデータ還元法を使って値を求めていきます。これらの人生の満足度の変数を作るに当たって、主成分分析と、それから因子分析を使って、この新しい変数を組み立てていきました。このページでは、この主成分分析、因子分析は一体どういうものかということを書いたページが続きますけれども、もう皆様ご存じでいらっしゃると思いますので、ここは飛ばします。

ただ、1つだけここで気を付けていかなければいけないことがあります。この2つのテクニックを使う際に気を付けていかなければいけないのは、この変数が序数であるということをお忘れにはならないということです。ですから、この主成分分析、因子分析、これを使う際には、この序数であることを念頭に置いて、特別なバージョンの分析を行っていかなければいけません。なので、この PCA、主成分分析の際には、ポリコリック PCA、つまり、多分主成分分析というものを私どもは使いました。私どもは、スタンダードな固定効

果回帰というものを行いました。その際の従属変数というのは、ファクター・アナリシスおよび主成分分析で入手をした人生満足度の指標です。

それでは、私どもが推定をしました1つ目のモデルを見ていきたいと思います。これは、経時的に推定をしたモデルです。だから、この ECHP の8年全部を考慮に入れています。このライフ・サティスファクションというのは、従属変数です。先ほど説明した方法で推定をした欠乏の度合いに基づいて、これを推定しています。また、このライフ・サティスファクションというのは、個人の家計の所得にも従属しています。これは、われわれが転換を行いまして、同等所得に転換をしています。そして、また、相対所得の尺度というのも、このライフ・サティスファクションの中に組み込んでおります。これは伝統的なやり方に基づいています。その個人が住んでいる国の平均所得です。そして、また同時に、幾つかのコントロール変数というものも導入を致しました。それは、社会人口動態的な変数であり、例えば、性別、年齢、結婚しているかどうか、教育、家系の構成、それから失業しているかどうかなどです。この2つ目のモデルですけれども、ECHP の最後のキーだけを使って設定を行いました。

ここで想定をしましたのは、このライフ・サティスファクションのレベルというのは、その個人の社会的排除によって決まると、に依存をしているという想定を立てました。その際には、このライフ・サティスファクションというのは、個人の所得、平均所得に依存をすると、従属するということになりますので、その際には、私どもは、恒久的な所得というものを使いました。それは、この個人のすべての期を通しての平均所得を使っています。この相関を見てみましたところ、欠乏と所得というのは、全く同じではないということが観測されました。つまり、この個人の所得と、それから欠乏変数の相関というのは、有意あるかたちで、負の数字にはなっていますけれども、マイナス 0.3 を超えることは決してなかった。ということは、この所得と、それから多元的な幸福感の間の重複が少ない、つまり、共通の要素が少ないということが確認されました。

それでは、回帰の結果を見ていきましょう。ここでお見せするのは、所得と欠乏と社会的排除の係数だけをお見せしていきます。コントロールに関しては、ここでは割愛を致します。最初のページが、これが全部 PCA に基づいたライフ・サティスファクションを表した表になっています。そして、次のページ、これがファクター・アナリシス、因子分析に基づいた表になっています。ここで非常に見ていただきたいポイントとしては、TDP、これは欠乏でありますけれども、この数字を見ますと、マイナスの負の数字になっています。それも、有意な負の数字になっているということです。このライフ・サティスファクション、個人の人生の満足感というのは、その個人の同等所得に正のかたちで従属することが分かります。しかし、欠乏によって、何かを加えられます。同じことが因子分析をやった結果でも分かります。

3つ目の表をご覧ください。それから4つ目の表。こちらも、PCA と FA、主成分分析と、それから因子分析が使われています。これは最終年度だけを取ったものです。これを見ま

すと、社会的排除というのも、個人のライフ・サティスファクションの重要な決定要因であることが分かります。そして、その影響は、負の影響があるということが分かります。この私どもの研究によって何が実証されたかということ、幸福の研究の研究結果が裏打ちされたということが分かりました。つまり、個人の所得とその他の幾つかの因子が一緒になって影響するという事です。そこで、私どもが提案をしましてのは、その他の要素、その他の因子の中に次のものを加えるように提案をしています。それは、最近、この所得分布の文献の中で導入をされた多面的な幸福感の指標、これを含めるように提案をしています。われわれの研究結果によりまして、欠乏を感じている人たち、それから社会的に排除されている人たちというのは、自分たちの人生への満足感、もしくは満足感が低いということが確認されました。

この研究調査結果は、欧州連合、EU がその中心的な目標の中に社会的排除との戦いというのを加えたその決定が正しい決定であったということをサポートするものであります。

以上です。ありがとうございました。(拍手)

司会：非常に分かりやすいプレゼンテーションをありがとうございました。質問をお願いします。

(質問者)：大変優れたプレゼンテーションをどうもありがとうございました。最後のほうのリグレーションの結果を拝見させていただいております。そのライフ・サティスファクションへの影響で、物質的欠乏の指標で SUMC とダンブロシオさんが開発した BDP という指標があるんですけど、どちらのほう効率的なエスティメーター、エフィシエント・ライフ・エスティメーターなのかということ、リグレッサーなのかということも、何か、教えていただけたらと思います。

ダンブロシオ氏：この SUMC というのは、これはもう先ほど申し上げましたシンプルカウントであって、ほかの他者との比較というものを含まません。このペーパーの中では、私どもは、ログライクリフッドは計算を行っておりませんので、残念ながら、今のご質問に今の段階でお答えすることができません。

ただ、BDP のほうがアールスクエアが高くなっていますので、これはペーパーの中では書いていますが、この表の中では示しておりませんが、これを一つの目安として考えていただければ、BDP のほうが説明力が高いと、SUMC より比べた場合に、BDP のほうが高いということです。

コンチータ・ダンプロシオ 氏 (写真右)



アンドルー・クラーク 氏（仏国立科学研究センター教授） 講演

クラーク氏：今日は、お時間を頂きまして、ありがとうございます。グッドニュースとバッドニュースがございます。まず、グッドニュースのほうですけれども、経済学者および政策立案者は、そろそろ主観的幸福感、サブジェクティブ・ウェルビーイングというのが重要な変数であるということ認識し始めてきているというのがグッドニュース。

ただ、バッドニュースがあります。バッドニュースは、この測定の仕方をまだわれわれが分からないということです。もしくは、この幸福感、ウェルビーイング、この尺度というのが、たくさんあり過ぎるということです。ここは、これは人々が今まで聞いてきた質問、ちょっとここに書いてみました。

この2つ目のポイントなんですけれども、これは何を比較しているかといいますと、実際に自分が経験した、そして実際に自分が生きてきた人生に対して、自分が覚えている自分の記憶の中の人生を比較しています。3つ目のポイントですけれども、これはヘドニック、いわゆる快樂的な幸福感、それからエウダイモニック、これがいわゆるエウダイモニアと呼ばれる幸福感を比較していますが、簡単な言葉で言いますと、ハピネス、つまり、幸せ対人生の意味、もしくは、自分の人生が意味のあるものだと感じているかどうかということの比較です。

この3つ目のポイントについて、今日はお話をしたいと思います。ハピネス、幸せ、幸福とか、それから満足度と比べた場合に、このエウダイモニアというのは、経済学の中でもあまり知られていない概念です。ここにこのスライドで書いてありますが、このエウダイモニアの定義なんですけれども、調査をするときにこれを聞くときの質問の内容というのは、例えば、生きがいを感じているかどうか、自分の人生で動機があるかどうか、自立しているかどうか、そして関心を持っているか、興味を持っているかなど、こういったことを聞いていきます。

ここで2つの種類の人たちを区別しています。どういう区別かといいますと、ハッピーだけれども、生きがいを感じていない人たち、一方、生きがいを感じているけれども、ハッピーと感じていない人たち、この区別をしています。でも、もしかしたら、これは同じことなのかもしれない。つまり、ハッピーな人たちというのは、いつも生きがいを感じているのかもしれない。分かりません。そこでそれを調べようということになりました。

その際にわれわれが使いましたのが、欧州社会調査、ESS というもので、これはネットからダウンロードが可能な調査です。このペーパーがここで引用されておりますけれども、この論文の中で、次のような比較を試みました。欧州連合の中の25カ国の中で、このハピネス、幸せと、それからミーニング・オブ・ライフ、いわゆる生きがい、これの比較を行ってまいりました。このデータのアドバンテージというのは、この中のいわゆるウェルビーイング、幸福感に関する特別なモジュール、スペシャルモジュールが含まれていたということです。その中では、このウェルビーイング、幸福感に関するさまざまな質問がなさ

れています。

その質問の中には、例えば、ハピネス、ハッピーかどうか、それから関心を持っているか、興味を持っているか、それから自立しているかどうかなど、そういう質問が、つまり、生活の質に関しての質問が行われておりますけれども、今私が手元に持っております日本での生活の質の質問の中でも、こういった質問がされていると理解しています。

では、私どもが聞いていった質問を、実際の質問をお見せしましょう。日本の生活の質調査と同じように、まず1つ目、非常にシンプルなハピネス、幸せに関する質問をしています。2つ目の質問、これもいわゆる快樂的な幸せに関する質問です。ただ、こちらのほうはもう少し内省的な、つまり、認識的な内容になっています。心理学者によりますと、この2つの変数、つまり、ハピネスとライフ・サティスファクションというのは別々のものであると言っています。ただ、心理学者たちは間違っています。この2つにおいて、この分布を見れば、非常に似ていることが分かります。

しかしながら、エウダイモニアは、どうでありましょうか。このエウダイモニアに関する標準的な定義というものは存在しません。心理学の文献の中で見られる2つの定義をここで見てみます。個人たちに問われた質問、6つの種類の質問がここに書かれています。もしその個人がいきいきとした元気感を持っている、つまり、フローレッシングという状態であれば、この6つの質問のうち、最初の2つについてはイエスと答えるはず、そして残りの4つの、少なくとも3つ、4つのうちの3つにイエスと答えるはずです。これを、質問を見れば分かりますけれども、この質問の中では、どれぐらい人生に樂觀視をしているか、関心を持っているか、人生の意味を見出しているかというような感覚的なものが含まれています。この観点から言いますと、欧州のヨーロッパ人の半分強の人たちがこれに当てはまる、つまり、フローレッシングになると。つまり、いきいきとした元気感を感じているということになりました。

2つ目の尺度ですけれども、これを開発しましたのがニュー・エコノミクス・ファウンデーションでありまして、その中では、3つの変数が作られています。その1つ目はバイタリティーですけれども、これは、例えば、夜、ゆっくり眠れたか、それとも寝つきが悪かったか、エネルギーがたくさんあると自分が感じているかどうか、もしくは、疲れていると感じているかどうか、そういった生氣に関するものです。2つ目の指標ですけれども、これはあたかも自分が自分をどういうふうに見ているか、自分の自己イメージに関するものです。つまり、自分に対してポジティブな感覚を持っているか、もしくは、自分自身に対して樂觀的な見方をしているかどうかということを知っています。そして、最後ですけれども、これは一連の質問なんです、この中で何を聞いているかといいますと、その個人がどのような活動をしているか、そしてその活動に関してその個人がどういう感覚を持っているか、つまり、すごく関心を持っているか、目的意識をやっているかどうかということを知っています。

そこで、ここではウェルビーイングに関する尺度、6つがあることとなります。最初の2

つがヘドニック、快樂的な尺度、残りの 4 つがエウダイモニアの尺度です。ここでわれわれが解いていく主要な質問というのは、これらの指標はお互いにどれぐらい違うものなのか、どれぐらいの差があるものなのかということです。シンプルな相関マトリクスで見た結果、これらがお互いに有意な正の相関を持っているということが分かりました。つまり、当然ながら、人生への満足感が高い人というのは、いきいきとした元気感を持っている確率が高くなる。生気感、生気を持って、バイタリティーがある確率が高くなる傾向にあります。つまり、満足感が低い人よりも、そういった傾向が高いということが分かります。

では、次に、回帰分析についてお話をします。回帰分析をすることによって、ウェルビーイング、つまり、幸福感のどの部分を説明できるかということをお話します。つまり、幸福感、ウェルビーイングのどの部分であれば、政策を用いることによって影響をもたらすことができるかということをお話します。そこでの質問ですけれども、同じ種類の説明変数が、このヘドニック、快樂的な幸福感と、それからエウダイモニア、両方に影響を及ぼすのかどうかということをお話したいと思います。そこでこのウェルビーイングの尺度 1 つ 1 つに対して、6 つの回帰分析を行いました。では、この 6 つの回帰分析、どれぐらい類似していたのでしょうか。

今お見せしました 6 つの回帰から、これは今の質問に答えるために、推定係数というものを出して行きました。そして、それを比較しました。そのためには、まず最初に見るのが、個人レベルの変数、例えば、年齢、性別、教育、所得を見ます。全部で、そのような個人の社会人口動態的な変数は 17 あります。そして、面白いことに、驚きのことは、これらの変数がすべてのウェルビーイングの尺度に対して、ほとんど同じかたちで影響を与えていたということです。ヘドニック、快樂的な尺度と、それからエウダイモニアの尺度で影響が違った、全く対立した影響だったというのは、本当にわずか、限られていました。

例えば、男性なんですけれども、男性のハッピー、つまり、幸福感の度合いは低い傾向にあるけれども、しかし、エウダイモニアのレベルは、有意のあるかたちで、より高いレベルであった。それから、もう引退した人たち、この人たちは、必ずしもアンハッピーであるわけではないけれども、ただ、エウダイモニアのレベルは低い傾向にある。ですので、基本的に、この個人の変数というのは、これによって大体同じようなウェルビーイング、幸福感につながるということが分かっています。ヘドニックであれ、エウダイモニアであれ、同じような影響につながっているということが分かります。

社会学者によりますと、クロスカントリーの比較、国と国の間の比較はすべきではないと。彼らは正しいです。国と国の間で比較をしてみますと、ヘドニックおよびエウダイモニアのウェルビーイングの尺度の中の一一致というのは非常に少ないことが分かります。幾つかの国々においては、ハピネスのスコアも高く、そして同時にエウダイモニアのスコアも高くなっています。ただ、大半の国々においては、この 2 つの値というのは、全く違う方向に動いています。ですから、欧州の中のさまざまな国々において、文化が違うことによって出てきている傾向であるということが示されるかと思えます。では、この分析を終

える前に、最後にこの分かったことを正式なかたちでまとめてご説明します。

この推定された係数間の相関係数を示したのが、この大きなテーブルです。一番左上の0.961という数字があります。これが示しているのは、ハピネスを起こさせる変数というのは、ほとんど同じかたちでライフ・サティスファクションにもつながっているということを示しています。また、ハピネスを生むその変数というのは、エウダイモニアを生む変数ともかなり近いということが分かります。ただ1つ例外がありますのが、この回復力というか、レジリエンスです。これはどうやら、ウェルビーイングの概念、これだけは1つ別個の概念であるようであります。

これは、新しい文献です。まだ分からないこともたくさんあります。本当に最近の証拠を使って、この質問に答えてみたいと思います。このウェルビーイング、幸福感の尺度に関していつも聞かれる批判というのは、次のようなものです。つまり、この尺度というのは、人々が言っていることを参照しているにすぎないと言われます。多くのエコノミストというのは、人々が言っている内容には関心がなく、人々がどういう行動を取っているかということに関心を示しています。そうであれば、このウェルビーイングの尺度のうち、どれが人々の実際の行動をより良く予測できるのか。

1つ目の証拠ですけれども、仮説上の仮定の選択に関するペーパーをご紹介します。例えば、学校の生徒、学生にこういう質問をします。「友達と出掛けて映画を見に行きたいですか？ それとも、家に残って勉強したいですか？」そして、その学生たちは、「その自分が取った選択によって、自分はどれぐらいハッピーに感じると思えますか？」という質問を聞かれます。しかし、また同時に、この選択に関して、そのほかのさまざまな評価に関しての質問も聞かれます。例えば、「その選択によって、どれぐらい目的意識が得られると思えますか？」と聞かれます。ですから、このペーパーの目的というのは、個人の選択を予測しようというものです。つまり、映画を見に出掛けるのか、それとも家に残って勉強するか、その選択を予測しようということを目的としています。

この選択を説明するものとしては、それをすることによってどれぐらいハッピーになるかということだけで決まるのか、それとも、ここに書いてあるさまざまな変数も影響するのかどうかです。回帰分析を行ったことによりまして、この選択の分散のうち、0.38はこの自分のハピネス、つまり、主観的な幸福感、これだけで説明ができました。11のハピネスではない尺度を加えた場合に、このアールスクエアは、確かに高い数字になりました。しかし、わずかに上がったのみであります。0.38だったのが、0.41に若干上がったということです。ということは、ほとんどの選択というのは、自分のハピネスによって決められるのだということを示しているのかもしれませんが。ただ、幾つかのこの選択のペアを見ますと、ノーハピネス、ハピネス以外の尺度が演じたより大きな役割について分かります。この著者はこういう議論を展開しています。人生の中での本当に重要な選択に関しては、ハピネス以外の要素、つまり、エウダイモニア、ノーハピネスの要素がかなり説明をする力を持つようになると、そのような議論を展開しています。

ですから、このヘドニック、快樂、エウダイモニア、この相対的な重要性というのは、われわれが何を説明しようとしているのかという対象によって、この相対関係が変わってくるのかもしれませんが。この今申し上げました証拠ですけれども、これは、仮定の状況の中で人々はどのような選択をするのかということに基づいた結果でした。

ただ、2つ目、こちらはもっと重要性が高くなります。つまり、人がいつ死ぬのかというのを私たちは知りたいのです。それは、このデータを使って見ることができます。これは、イングリッシュ・ロンギチューディナル・スタディー・オブ・エイジング、つまり、高齢化に関するイングランドの追跡調査です。ただ、ご存じかと思えますけれども、これはアメリカの HRS 調査のコピーであります。この HRS というのは、ヘルス・アンド・リタイアメント・サーベイ、これをまねたものです。これは、パネル調査でありまして、6つのウェーブから構成されております。調査は2年に1度行われています。この幾つかの期の中で、個人たちはさまざまな、本当にさまざまな主観的な幸福感、サブジェクティブ・ウェルビーイングに関する質問が与えられました。

特に2004年行われましたウェーブ2、これのときにたくさんの質問がされています。これはパネル調査でありますので、ウェーブ2で答えた人たち、これが将来どうなっているのかということを追跡してみることが可能です。この高齢化の追跡調査という名前から分かりますように、この調査の対象となっているのはお年寄りです。高齢者です。2002年のウェーブ1、このときの調査の対象となっていた人たちというのは、みんな50歳以上の人たちです。このウェーブ2の中で、回答者たちは一連の質問が聞かれています。まず1つ目の種類が、この快樂的な、ヘドニックな幸福感、ウェルビーイングに関する質問、その中にはハピネスも含まれます。それから2つ目は、評価的な、つまり、認識的な質問が聞かれています。つまり、ライフ・サティスファクションのような質問です。それから3つ目が、エウダイモニアに関する質問、つまり、生きがいを感じているか、目的意識があるかどうかなどが聞かれています。

ここで、このリサーチを行った内容というのは、ウェーブ2の質問に答えた人たちの中で、ウェーブ5、つまり、2010年、2011年、6年後でまだ何人が生きてるか、まだ死んでいない人たちがどれぐらいいるかということです。ウェーブ5の段階で死んでいた人の割合というのは、サンプルの15%でした。そこでわれわれが知りたいのは、ウェーブ5の段階での死亡を予測できるウェルビーイングに関する尺度はどれなのかということです。この研究というのは最近の研究でありまして、研究者は、Andrew Stepteeと彼の同僚です。彼は、疫学者でありまして、ユニバーシティ・カレッジ・オブ・ロンドンの疫学者です。この研究はインターネットからダウンロードが可能です。このウェルビーイング、幸福感に関して聞かれた質問の一つは、非常にシンプルな質問でありまして、しかしながら、サイコロジスト、心理学者たちは、これは非常に今、重要性が高まっていると考えているものです。それは何であるかということ、エンジョイメント、楽しんでいるかどうかということです。

この楽しんでい、エンジョイということに関して、2つの質問が聞かれています。このCASP19のモジュールの中で、2つの質問が聞かれています。まず1つ目は、私は自分がやっていることを楽しんでいかどうかということを知っている。それから2つ目は、私はいろいろな人たちと、ほかの人たちと一緒にいるのが楽しいかどうかということを知っています。これを使って、つまり、ウェーブ2で楽しいと答えているか、答えていないかということに基づいて、ウェーブ5でどれくらい死んでいるかと、亡くなっているかということを見てみます。この右上の箱の中に書いてある数字、それから左下のグラフ、これを見て分かりますように、エンジョイメント、つまり、楽しんでい、いないかということは、死亡するかどうかを予測できます。例えば、一番楽しいと答えた人たちのグループの死亡率というのは、一番楽しくないと答えていたグループの死亡率の3分の1です。ですから、このヘドニック、快樂的な幸福の尺度というのは、死亡を予測できる要素です。

このELSAという分析の良いところは、ほかの幸福に関する指標でも同じ分析を行うことが可能だということです。この表ですけれども、これでは、ライフ・サティスファクション、人生の満足度がどれくらい死亡を予測できるかということを示しています。つまり、ウェーブ2で満足していると答えたかどうかで、ウェーブ5の段階で死亡しているかどうかをどれくらい予測できるかです。確かにこれを見たら、ライフ・サティスファクションというのも死亡を予測できることが分かります。しかし、その予測能力は、先ほどのシンプルなエンジョイメント、楽しいかどうかというあちらの予測能力よりは小さくなります。

そして、このウェーブ2の人たちの一部は、いわゆるエコロジカル・モメンタリー・アセスメントという評価を受けました。同じ質問を1日の中で4回聞かれたわけです。つまり、毎回、「あなたはどれくらいハッピーですか?」、「どれくらいワクワクしていますか?」、「どれくらい不安ですか?」、「どれくらい心配していますか?」、「どれくらい疲れていますか?」と、聞かれました、4回。朝起きたときに、まず1回目、聞かれます。それから日中、2回聞かれます。それから寝る前に、もう1回聞かれます。

もちろん、当然ながら、これはフェイス・トゥー・フェイスで聞かれたわけではありません。携帯電話で聞かれているのです。これは、生活の質の調査の7番目の質問と同じようなものを意図した質問になっています。ELSAの質問というのは、同じ日に聞かれた質問の多くから取られています。生活の質のほうの質問は、例えば、ここ数週間の間で平均的にどういうふうに感じているかというような質問でありますので、これは1日再現法に似たような質問になっています。その分かった結果ですけれども、このEMAの尺度というのも、このELSAの中で生存するかどうかということを知ることができる尺度であることが分かりました。ただ、残念なことに、このELSAの報告の中では、このウェーブ2の尺度によって、死が予測されたというその結果はリストされておられません。表示されておられません。このような分析と一緒にUCLと行う、そのようなプロジェクトを今、提案をしております。

ただ、全体的に申し上げますと、日本の調査の中でも、既存の情報で、私が今お話をした

ような問題に対応するような既存の情報は存在していると思います。つまり、既存の調査の中の情報の中では、例えば、ウェルビーイングに関するもの、それから物質的な欠乏に関するもの、それから近隣との関係の欠乏に関するもの、そのような情報が既に存在しているものはあると思います。われわれとしても、皆様方がどのような研究作業をしていらっしゃるのかということを見出すという意味では、非常に有用な旅であるというふうに、つまり、お互いがどういうことをやっているかということを見出し合う、非常に有用な旅であると思っています。

ですので、お招きいただきまして、ありがとうございます。(拍手)

司会：クラーク先生、どうもありがとうございました。フロアから質問があれば、どうぞ。

質問者：1つ目の質問ですけれども、このエウダイモニアという言葉が日本人にとっては非常に難しい言葉であります。あまりこの哲学に経験もないし、学校で学んだというわけでもありませんけれども、質問は、欧州大陸で、これは一般的に使われている言葉なのか、それとも、学者、研究者が使ういわゆる専門用語なのか、どのように日常的にこの言葉が使われているのでしょうか。

クラーク氏：ジャーナルの編集者たち、同じ質問が聞かれました。彼らもこの言葉は聞いたことがなかったんです。同義語として考えられるのが、グッドライフ、もしくは、ライフ・ウェルリブド、良い暮らし、つまり、良い生活、良い暮らし、つまり、ハッピーライフというよりは、グッドライフ、ライフ・ウェルリブドが同義語になります。

ミーニングフルライフ、生きがいのある生、意味のある人生というのももう一つの同義語として使えるかと思います。

質問者：大変ディスティングイッシュなプレゼンテーションをありがとうございました。最後のそのサバイバル分析について関心がございます。ここでは、その生活のエンjoyメントがサバイバルに今、影響しているというふうなコーザリティーを導き出したと解釈をしております。

クラーク氏：はい。それがコックス回帰の因果関係の解釈です。つまり、最初の段階でどれぐらいのレベルのウェルビーイングであったかということによって、その後の段階での罹患率とか死亡率が決まるという考え方です。

質問者：お伺いしたいのは、そのハザード・リグレーションの中で、例えば、健康上、ヘルスとか、そういったものをコントロールしているのかどうかということをお願いです。

す。というのは、この健康状態というのが、エンジョイメントも効くし、そういうサバイバルにまで効くというふうな感じの要因がコントロールされているのかどうかということなんです。

クラーク氏：これは私が行った研究ではないので、全面的にディフェンド、弁護をすることができないのですけれども、ただ、分析の幾つかは二変量、そしてそのほかは多変量で解析がされております。例えば、これを見てもみますと、このハザード解析ですけれども、エイジとジェンダーだけだと 0.5、これにヘルスを加えますと 1 になりますけれども、そんなに差がないということは、ヘルス以外の追加的な情報があるということが分かるかと思えます。ただ、これを全面的に理解したいということであれば、当然ながら、ヘルスおよびサブジェクティブ・ウェルビーイング、こういったものを含めて分析をすべきでありましょう。

司会：では、時間が参りましたので、ここで終わりにしたいと思います。本日は、両先生、ありがとうございました。(拍手)

アンドルー・クラーク 氏 (写真左)

